

Title	Victor Ehrenberg ; The people of Aristophanes, a sociology of old Attic comedy
Sub Title	
Author	宮崎, 武三(Miyazaki, Takezo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1958
Jtitle	史学 Vol.30, No.4 (1958. 3) ,p.130(548)- 132(550)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19580300-0130

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書 評

Victor Ehrenberg; The People of Aristophanes, A Sociology of Old Attic Comedy

Basil Blackwell. Oxford, 1951

ロンドン大學に於ける古代史のリーダーである著者は、既に多くの著作によつて、古代史學界に貢献して來たが、本書は特に獨創的な研究として學界の注目を浴びたものである。本書はアッチカ古喜劇に基礎を置き、これに示されたアテナイ人の生活を歴史的社會學的に考察しようとする意圖の下に書かれた。著者エーレンベルクの意圖するところは、アッチカ古喜劇の背後にあつてこれを成立させている社會の「霧圍氣」を明るみに出さうとする事である。この場合、現實を映し出す鏡となるものが、空想に満ち、誇張と歪曲とによつて特色づけられてゐるアッチカ古喜劇であるといふ點に關しては、疑問を抱く人があるかもしれない。しかし古喜劇程直接に民衆から湧出る資料はなく、又これ程鮮明に、民衆を社會的經濟的現實の基盤として叙述する資料は、他にないのである。古喜劇に於ては、民衆の現實の姿は悲劇に於ける如く神

話の形をとつて表現されたり、淨化されたりする様な事はない。そこでは、政治家や哲學者によつて見逃され勝ちな民衆の現實の姿が、誇張とか歪曲とかいふ假面の背後に存在してゐるのである。資料の不足といふ惡條件は存在してゐるとしても、アッチカ古喜劇は、當時の民衆の實情を疑ひもなく反映して居り、アテナイ人の「生活の横斷面」、當時の社會の「霧圍氣」を明かにせんとしてアッチカ古喜劇を取上げたエーレンベルクの意圖は、見事に活かされてゐると言ふ事が出来るのである。

本書は、第一章で古喜劇についての概觀を試み、第二章では現存してゐる古喜劇の夫々について簡単な紹介をしてゐる。第三章から第七章迄が社會の構成要素である農民、上層階級、商人と職人、市民と外國人、奴隸を取上げて詳細に論じてゐる部分であり、第九章以下が家族と隣人、貨幣と財産、宗教と教育、戦争と平和、經濟と國家、民衆と國家等の問題について論ぜられ、最後に結論が置かれてゐる。著者の研究は、アッチカ古喜劇という限られた資料を餘す所なく利用し盡して居り、その驚くべき周到さは、膨大な量に上る年表、總索引、引用句索引に現れてゐる。著者は經濟史の専門家ではないのであるが、斷片的な古喜劇の引用から一連のまとまりあるアテナイ經濟の實態を引出さうとする際には、勿論著者獨自の見解が見られるわけであり、それによれば、紀元前五、四世紀のアテナイの經濟は、所謂“homo politicus”と

“homo economicus”の對立といふ顯著な現象に要約されるが、結局、政治に對する經濟の優越が支配的なものになるといふのである。古代アテナイの經濟を論ずる場合、一方には都市國家本來の封鎖的原始的特徴を強調する立場があり、又、他方かうしたポリス本來の組織とは縁のない商業資本主義を強調する立場があるのであるが、エーレンベルクの見解は、この兩者の中間をとり、紀元前五、四世紀のアテナイの經濟を、この二つの全く異なつた經濟原理の對立抗爭といふ様相に於て把へてゐるといふ點で、優れた成果をあげてゐると言ふ事が出来る。政治に對する經濟の勝利は、「暮し向きのよい國こそ祖國である」といふ「福の神」からの引用句の中に、最も適切に表現されてゐる。それは古い都市國家の傳統に對する新しい個人主義の挑戦であり、ポリスの羈絆を越えた商業資本主義の勝利であつた。アリストパネースが、屢々外見上は保守主義の立場をとり、愛國的熱情を披瀝してゐるにも拘らず、「本質的には彼の攻撃したソフィスト達の學說にある信條に類似した個人主義的唯物觀の代表者であつた」(三五九頁一九行以下)といふエーレンベルクの見解は、單純な外見の裏にひそむ眞相を鋭く指摘した卓見である。アッチカ古喜劇は、言ふ迄もなく時代と社會の精神の反映なのであるから、後期の作品は當然純粹な主觀主義と個人主義に陥つてしまつてゐる。古喜劇の特色たる顯著な政治性は次第に失はれて行き、個人主義と經濟人の

優勢を反映して、作風もその社會觀に迎へられる様になつて來るのである。政治性を失つた古喜劇はもはや古喜劇ではない。それは新しい喜劇の誕生、即ち文學史家の言ふ中期喜劇の誕生を意味するのである。古喜劇は政治の世界と訣別して中期喜劇になつたといふのがエーレンベルクの結論である。なほ本書に見られる著者の見解として色々注目すべき問題があるので蛇足ながら二、三氣付いた事を附言してみよう。アリストパネースの喜劇に於て、文學史家の論爭の中心となる「雲」に於けるソクラテスの取扱ひ方や「女の議會」に於けるプラトンの理想國家論との關係について、簡單にふれてゐるだけなのは、本書の目的と直接關係がないといふ點からみて當然であるが、その簡單ながら明確に割切つてゐる論旨は、古喜劇の性格を全體として把握してゐる者のみが持つ強さがある。又、商工業階級の財産の程度の考察から、それに關聯して奴隸の經濟面に於て果たした役割を評價するに當つて、著者独自の見解が多く見られるのである。例へば「我々の知る限りでは、アテナイ經濟は奴隸勞働に支配された事は一度もなく、アテナイの政策は奴隸の數とか奴隸の存在とかによつて、影響を受けた事はなかつた」(一九一頁一〇行以下)等と奴隸勞働の意義を低く見積つてゐる點等は、問題の多いところであらう。いづれにしても、エーレンベルクの見解はアテナイの社會經濟史を、アッチカ古喜劇の面から考察するといふ興味ある主題と取組んで見事

な成果をあげて居り、問題の多い社會經濟史の分野に、新生面を開いてゐると言ふ事が出來よう。(宮崎武三)

加藤義成著『出雲國風土記參究』

昭和三十二年十月・至文堂刊

古代における地方の狀況をしるした風土記の研究は戦前にまして最近約十年間に著しい進展をみせ、またその成果が総合的に纏められ發表される機會も多かつたと云えよう。例えば「校本肥前風土記とその研究」(昭26)、「出雲國風土記の研究」(昭28)、「豊後風土記之研究」(昭31)の三著がその代表例としてあげられよう。これらに載せられた諸氏の論考は從來の研究を一步進めたものとして見逃せないが、この三著の他書に比して中でも注目されるところは、その研究に際し基礎となる本文校訂がそれぞれについて平田俊春氏、田中卓氏、そして佐藤四信氏によつて果され、しかも優れた成果をあげられていることであろう。

ところで風土記研究の中にあつて、特に出雲國風土記については、戦後先ず藪田嘉一郎氏がその偽書説(「出雲風土記剝偽」日本歴史22號・昭25、及東洋古史研究叢書之一・昭26)を投ぜられたが、これが學界をいたく刺戟し、その結果これに反駁する諸論考が次々に發表され、その研究は一段と生彩を加えるに至り、や

がてこの氣運は先にあげた「出雲國風土記の研究」の大きいなる結實をみるまでに及ぶのであるが、かかるところに加えて最近ここに出雲地方にあつて曾て教鞭をとられながら長年この方面の研究を續けられて來た加藤義成氏が、五百余頁に及ぶ出雲國風土記の詳細なる註釋書と云うべき大部な本書を發表されたことは、本風土記研究に際し從來欠けていた入門書を得た點で注目されるばかりか、種々の研究成果を盛込まれた一書を、更に風土記研究の分野に投ぜられたことであり、正に慶賀すべきことと云えよう。

この他最近までに發表されているものとして野口保市郎氏や鵜殿正元氏などによる常陸國風土記の研究もみられているが、この加藤氏の本書をも含め、これら最近の研究の傾向としては、それが中央の研究者によるところも少くないが、風土記の性格の然らしめるところか、それぞれの地方にある學究、或はその地方出身の方々の地道な探究の成果がその大きな部分を占め、功獻していることが特徴と云えよう。そして今後としては、播磨、常陸について優れた本文校訂のなされること及びその優れた校訂の風土記による一層の研究が待望されるところであろう。

さて本書は今述べたように著者二十年に亘る苦心の勞作を纏めたものであるが、「參究」と題される如く、その文章の解明に當つては單なる語釋、或は通釋に止まることなく、語源的、音韻的、そして文法的に究明されようとし、更に廣く國文學、史學、民俗